

Glocal Tenri



1

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.1 January 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
ヘレン・ケラー女史の天理来訪
／高見宇造…………… 1
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (36)
「大蛇」について③
／佐藤孝則…………… 2
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (25)
太平洋戦争と北米伝道③ 教会長たちの抑留所生活
／尾上貴行…………… 3
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (33)
「おさしづ」第4巻における刻限と「道」
／澤井治郎…………… 4
- ・ 日本語教育と海外伝道 (6)
国内での日本語教育と海外での日本語教育①
／大内泰夫…………… 5
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (4)
「心と体」と「霊と肉」—翻訳を通じて見えてくる、もう一つの「あれか、これか」
／金子 昭…………… 6
- ・ 遺跡からのメッセージ (42)
文化遺産を今に活かす⑨ 世界遺産をめざす明日香村
／桑原久男…………… 7
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (23)
フランス共同体
／森 洋明…………… 8
- ・ 現代宗教と女性 (22)
当事者とは誰か
／金子珠理…………… 9
- ・ 思案・試案・私案
失われる命……“旧優生保護法”④
／八木三郎…………… 10
- ・ 図書紹介 (110)
研究所員の近著より
／堀内みどり…………… 11
- ・ 平成 30 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (4)
第 6 講：52「琴を習いや」
／堀内みどり…………… 12
- ・ English Summary…………… 13
- ・ おやさと研究所ニュース…………… 14
日本爬虫両棲類学会第 57 回大会で研究発表 (佐藤孝則)／教団付置研究所懇話会第 17 回年次大会に出席 (金子昭)／日本生命倫理学会第 30 回年次大会に出席 (金子昭)／おやさと研究所の出版物一覧と購入のご案内／平成 30 年度「教学と現代」案内

巻頭言

ヘレン・ケラー女史の天理来訪

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いたします。

つつあります」と演説、戦後復興を目指す日本に力強いメッセージとなった。

平成 30 年はヘレン・ケラー女史が 1968 年、88 歳で生涯を閉じてから 50 年目の年になった。女史は「見えない、聞こえない、話せない」という三重苦を克服した「奇跡の人」と呼ばれる。そこで日本ライトハウスは、11 月 24 日、女史を偲ぶ会、「ヘレン・ケラー女史と岩橋武夫」を大阪市中央公会堂で開催、私も出席をした。当日は村木厚子氏 (元厚生労働事務次官) の記念講演「ヘレン・ケラー女史来訪の意味」があり、女史の来日が昭和 24 年の身体障害者福祉法制定に大きく寄与したことを取り上げ、出席者は大いに感銘を受けた。視覚障害者である岩橋は日本の 4 大社会事業家の一人に数えられるが、日本ライトハウスを創業し障害者福祉に多大な貢献をした人である。岩橋との親交により女史は戦前・戦後計 3 回来日した。

女史はこの後、東京を皮切りに横浜、仙台、函館、札幌、酒田、金沢、名古屋、大阪、神戸、京都、広島、博多、福岡、最後の長崎と主要都市を駆け回った。ところでこうした過密スケジュールにも拘わらず、10 月 9 日に天理教教会本部を訪れた事は余り知られていない。『天理時報』(昭和 23 年 10 月 17 日号)はその様子を次のように伝えている。

「トムソン秘書、ライト・ハウス館長岩橋夫婦と共に、自動車で奈良まで出迎えた小野施設課長の案内で本部玄関に到着。押し寄せる人波の中を直ちに奥の洋間に入り真柱夫妻、家族、詰番夫婦、諸井教務総長と固い握手を交わし真柱令嬢、婦人会委員たちの接待を啜りながらトムソン秘書、岩橋氏の通訳でしばしば真柱と懇談を行い『どうぞお使い下さい』と真柱が春日塗りの小形机、ハッピー、木盆、写真帳を土産に贈るとケラー女史はいく

昭和 23 年、2 度目の来日に際しては毎日新聞社が全面的に協力、全国で講演会や募金運動が行われた。同紙元日号では「ともすれば絶望的になり勝ちな日本国民に、人間の力でどんな不幸からも立ち上がれることを女史は身をもって教える。これこそ今度の来朝の真の目的です」と記している。来日した女史を迎え 9 月 4 日、皇居二重橋前広場で「歓迎国民大会」が開催。詰めかけた約 5 万人の聴衆を前に冒頭、総司令部公共衛生福祉局ネフ福祉課長が「女史の来訪は日本の不幸な人々に対する衛生医療施設の向上ばかりでなく日本人一般への大きな光となろう」と挨拶。続いて女史が「今や新日本の黎明は皆様の上に輝き始めました。私が願う事は皆様の持っているランプの燈を今少し高く差し上げて道を照らして下さい。……全ての古い観念を捨て人間は互いに敵対することなく、全ての人々は兄弟であり共通した善に対する良き協力者でなければなりません。今や新しい途は開け

どもなぜながら『オービューティフル』を連発。……小憩後、真柱の案内で一行は教祖殿に参拝して色々説明を聞いた後、玄関で再び真柱と固い握手を交わし午後四時玄関脇から沿道に山のように立ちならぶ人の群に挨拶を送りつゝ再び奈良に向かった」と記している。女史は過酷なスケジュールのなか、なぜ天理訪問を組み込んだのか、とても興味深いことであるが、恐らく岩橋が女史に進言したのではないだろうか。中山正善 2 代真柱は大正 14 年に奈良盲学校の校主を務めたが、その上からのこととも考えられる。まったく想像の域を出ないが、1 時間という僅かの滞在のなかで女史は「歓迎国民大会」の演説に込めた思いを真柱に伝えたかったことだけは間違いのないだろう。それは時あたかも戦後日本の復興に合わせるかのように、同年 5 月に諸井慶五郎教務総長から「文化社会施設の地方普及」による社会救済が打ち出された旬でもあった。